Confido 信じ・希望し・愛深く
Desidero
Diligo

St Cecilia OG会
25. 松和会会報
■発行：学校法人大和学園
聖セシリア女子高等学校同窓会「松和会」
神奈川県大和市南林間3-10-1
〒242-0006　☎046-274-3234
■会員数：5879名（平成18年3月現在）
■発行日：平成18年５月１日

Angel

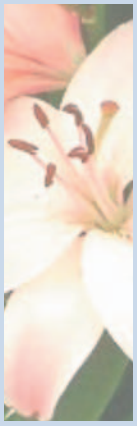
【三大天使】

聖書や絵画などでも描かれている、「ガブリエル」・「ミカエル」・「ラファエル」は三大天使といいます。

◇ミカエル◇（意味：「神に似たもの」）
楽園の守護であるミカエルは神が最初に創られた天使と言われ、サタンを地獄に落とした戦いで指揮をとり、最後の審判では死者の魂を天秤にかける役割を持つといわれています。

◇ガブリエル◇（意味：「神の英雄」）
新約聖書の中の受胎告知の場面で聖マリアに神様からのお告げを伝えた天使で知られ、神のメッセージを伝える告知・啓示の天使です。

◇ラファエル◇（意味：「神の癒し」）
聖書には登場しないのであまり知られていませんが、ラファエルは旅人の守護天使であり、また病気や怪我を癒す天使でもあります。



思い出に浸って

松和会名誉会長　伊東　千鶴子

２００５年、６月４日に開催されました松和会総会に出席させていただきました。会員の皆様に大変歓迎していただき、恐縮いたしました。本当にありがとうございました。紙面にてお礼申しあげます。

前年に行われました７５周年記念の聖セシリア祭にも久しぶりに同窓会の方々にお目にかかりましたが、総会当日に集まられた会員の中にもその時にお会いした方々も多く、より親しく、お話しするまたとない機会に恵まれ、楽しい時間を過ごすことが出来ました。

松和会総会では、昭和初期の卒業生にお目にかかることができ、私よりも少しお年でいらっしゃるのに、大変お元気でした。お隣に座ってくださり、共通の話題となる大和学園時代や先代の校長先生の若い頃の思い出話に花が咲きました。

今年の２月１２日で、先代の校長先生が亡くなられて３５年になります。

３５周年を記念して、この度「ただ信頼あるのみ」という題で、小伝が発行されました。皆様にもお配りしたいと思っております。改めて、「神様を信じ、希望し、愛深く」生きることの価値を理解していただけるのではないかと思っております。

変わらないもの、変わるもの

松和会会長　原　　信　江

伊東千鶴子先生の文章にもあるように、今年は、創立者伊東静江先生の３５回忌にあたり、学園ではその足跡をまとめたものがつくられました。創立７７年目を迎えましたが、お二人の校長先生が学校を守られてきました。

私は、伊東静江先生が亡くなられたとき、中学校３年間を修了するときでしたが、校長先生の偉大さははかりしれないものでした。いつも厳しく、気丈な姿に私たち生徒は、近寄りがたい存在でもありましたが、月日がたち、前校長先生を思い浮かべるとき、思い出されることは、とても小さな一人の人間としての「祈る」姿です。神を信頼し、自分のすべてを神にささげることにより、力をいただき、生きてこられたのだと思います。私は現校長先生である伊東千鶴子先生に変わられたとき、大きく変化し、違う学校になっていくように思うこともありました。しかし、「神を識り、人を愛する心」は、いつのときも受け継がれ、変わることのない伝統が、教育に生かされています。

主よ、変えられないものを受け入れる心の静けさと、変えられるものを変える勇気と、
その両者を見分ける英知を与え給え。　（ニーベの祈りより）

この祈りのように、変わらないもの、変わるものが融合され、学園は繁栄していくことと思います。今年卒業する生徒に、この学校のどんなところが良かったかを聞いてみると、「温かい仲間がいた」ということでした。神様に導かれ、支えてくれる隣人がいるから、ひとりひとりが自分らしく輝けたのでしょう。多くの人に愛された生徒たち、今も、将来も、人を愛し、自分にできる小さな行いを大切にできる人となってくれると思います。

卒業生の皆様、温かな愛に包まれた学園にいつでもいらしてください。

Book Review 読書雑感

「ことば」

大野　栄子　（高等学校教諭）

私の中から生まれてくる言葉は、皆無に等しい。教師なら、気の効いたあるいは人の心に刻まれるような言葉をひとつやふたつ持っていそうなものだが、哀しいほど私にはない。うんうんと苦しんでばかりいる。

幼いころから本には親しんでいた。自分にないものを埋めたくなるのだと思う。いつものめりこむように小説や戯曲を読む。見も知らぬ情景が目の前に拡がり、登場人物とともに異なる世界を生きはじめると、外の音がピタッと止んでしまう。では、愛読書は何か？と問われると、答えるのが妙に気恥ずかしい。自分自身がさらけ出されるような気がするからだ。その時に答えた書名が私の分身のような気さえするからだ。作者にとっては迷惑な話だと思うが、言葉から成る作品は、そこまで人を魅了する力を持っているという事だと思う。

今回、勇気をもって皆様にご紹介するのは、詩集「あのひとが来て」である。サマーセミナーの閉講式で読まれた詩「生きる」を覚えておられるだろうか。その作者谷川俊太郎氏の作品の中から16編を選び、画家山本容子氏が絵本にまとめた。俊太郎氏の息子賢作氏が父の詩を歌にしたＣＤがついている。文字を目で追うだけでもしみじみと感じ入ることができる詩であるのに、言葉が更に胸に響いてくる表現となっている。難解ではない。心を日なたにしてくれる作品である。

クラブ紹介

アートフォーラム

アートフォーラムは、個人製作を主な活動としています。そして、アートに興味を持ち、手作業が好きでたまらない仲間同志が、切磋琢磨し、表現力を高めていくひとつのチームでもあります。

中学生は新しい技法や材料と出会いながら、楽しく活動をします。油絵や砂絵などに初挑戦して、技術を身につけていきます。共同制作は、部員がひとつの作品を目指し、時には意見がまとまらない難題に立ち向かいながらつくりあげます。苦労して完成した作品ほど心に思い出深く残ります。

高校生は、今まで養ってきた技術に加え、自分の想像力や感性を表出した抽象画に取り組みます。
美術に対する視野を広げ、難易度の高い作品に挑戦し、試行錯誤を繰り返しながら描写力を向上させていきます。

私たちの作品は、毎年文化週間で一斉に展示されます。この期間は、アート部員全体が目的に向かってひとつになれる時です。ひとりひとりが心を込めて作りあげた個性溢れる作品は、私たちにとって誇らしい宝物なのです。

アートフォーラムは、クラスとはまた違う私たちのもうひとつの居場所です。これからもこの場所で、心から表現していきたいと思います。

松和会総会

一昨年の学園創立75周年を記念し、昨年6月4日に町田のラ・ポール千寿閣で松和会総会および懇親会が開催されました。当日は50名ほどの方々にご参加いただき、その中には遠く海外から来ていただいた方や、親子二世代で卒業生という方もおられました。また今回は昭和13年卒から平成16年卒までと様々な年代の方が集まり、学園の歴史の深さをあらためて実感しました。

総会では、お忙しいなかをご出席いただいた、松和会の名誉会長である伊東千鶴子校長先生よりたいへん温かいお言葉をいただき、参加者も学生の頃に戻ったように校長先生のお話に聞き入る姿が印象的でした。

総会の様子

盛り上がったくじ引きゲーム

総会に続き行われた懇親会は、同級会のような賑やかさでした。とりわけ参加者全員分用意された紐の一本にだけ「当たり」があるという「くじ引き」では、40人あまりが二重三重の輪になり押し合い圧し合いしながら細い紐を持ち、一斉に引っ張ると、主催者が想像していた以上に壮絶な(!?)くじ引きとなりました。しかしそれもまた楽しいハプニングであったように思います。

同窓会だより PART 1

手嶋　理恵　(昭和59年度卒)

２００５年１０月１日(土)、町田のErbettaにて約１０年ぶりの同窓会を開催しました。卒業以来２回目となる同窓会で、ちょうど４０代となる年回りの私たちがまるで昔に戻ったような盛り上がりをみせていたので、お店にいらしていた他のお客様にはさぞご迷惑なうるささだったことでしょう(笑)。

当日集まれたのは35名。既婚・未婚・いろいろ取り混ぜ、"聖セシリア女子高校"と書かれたチョコプレートの乗ったケーキをいただきながら、みんなで楽しいひと時を過ごすことができました。数名が名残惜しげに帰ったものの、30名以上で二次会のお店を探して移動、次回の幹事を任命し次の再開を約束しての解散となりました。

～2005.6.4　町田ラ・ポール千寿閣にて

懇親会の半ば、学園紹介のビデオを2本上映しました。1本は近年のもので、もう1本はたいへん古い学園の様子が録されているものでしたので、様々な年代の参加者それぞれが学園の遷り変りを驚きとともに懐かしくご覧になられたのではないかと思います。

校長先生を囲む大先輩たち

和やかな雰囲気のなか懇親会もお開きとなり、皆さん久しぶりにお会いした校長先生や同じ学園の思い出を持つ仲間と過ごしたひと時を思い返しながら帰途につかれたのではないかと思います。

松和会はこれからも会員の方々の交流の機会を増やすことができればと考えております。
皆さまのご意見ご要望などをぜひ松和会までお寄せください

同窓会だより PART 2

今泉宏美　（平成６年度卒）

私たち平成６年度卒業生は、寒さも増す１２月３日、横浜国際ホテルにて同窓会を開きました。当日は師走の気忙しい中にも関わらず、５０名近くの旧友が顔を揃え、近況報告や昔話で賑やかに花を咲かせ、時間がたつのも忘れる程の盛況ぶりでした。

卒業後約１０年、女性としても大きな区切りである≪３０歳≫を目前とした私たち。社会人として働く女性の真髄を極めようとするもの、自己研鑽のため自らに大きな問題を課し、それに邁進する者、家庭に入り、家事・育児に励む者。同じ学び舎で学んだ私たちも、各自が確実に歳を重ね、≪変化・進化したさま≫を互いに感じあったひと時でした。

今後は正に多種多様な時間経過を経ることになるであろう私たちですが、今回不参加であった仲間ともまた、再会できる日を楽しみにしつつ、日々の生活を改めて感謝しながら送ろうと互いにエールを送りあいました。

こんな素敵な卒業生

～奇跡～　多くの人に支えられて…

平成７年度卒　間鍋　美喜

右端が間鍋さん

セシリアを卒業してから～今日まで～

セシリアを卒業し、大学を卒業し、一般職の気ままなＯＬをして毎日平凡に暮らしていた社会人２年目の秋、私は交通事故に遭いました。

乗っていた車が橋の欄干に衝突し横転、ガードパイプが車内に入り、左大腿部に貫通する大怪我を負いました。動脈、静脈ともに損傷。大腿骨は開放粉砕骨折をしていました。病院に到着したとき、すでに左足の脈はなかったそうです。大きな事故だったので、レスキュー隊も出動するほどでした。

車はまっさかさま、扉は開かない状態、しかもガソリンも漏れ出している。レスキュー隊の方は火の粉を出さず、振動で足が痛くならないようにエアーソーで扉を切り、細心の注意を払って私を助け出してくださいました。その指揮を執っていたのが当時、多摩特別救助隊長だった巻田隊長さんでした。

高校時代の間鍋さん
（右から２番目）

１つ目の病院では動脈･静脈の人工血管の緊急手術。２つ目の病院では膝下の骨を大腿骨に移植する手術。３つ目の病院ではリハビリ。合計５回の手術と497日間の長い入院生活を送りました。

後から聞くところによると、雨ざらしの汚いガードパイプが貫通したことで感染症との闘いで足を切断せざるを得ないかもしれないと、両親は医師から何度か言われたそうです。どの医師にも足がついているのは奇跡だと言われます。現在は左足に麻痺や運動の制約があるものの松葉杖で歩けるほどに回復して、のんびりと生活しています。家族、友達、ドクター、看護師さん私の周りのすべての人に支えられて今があります。

松和会の役員もさせていただいており、このような形で会報に載せていただくことになりました。

退院祝いのパーティー

かけがえのない友人たち

事故の知らせを聞いた友達がすぐにみんなからの応援メッセージを持って救命センターにいる私に届けてくれました。ある友達はお母様と一緒にお見舞いに来てくれました。初めての入院で不安だった私はどんなに励まされたことか。

退院を前に入院中にお見舞いに来てくれたセシリアの友達を招き食事会をしました。今のありのままの私を今までと変わりなく接し、さりげない優しさで包んでくれている友達にただひたすら感謝です。

また、退院後すぐに温泉にも連れて行ってもらいました。私の足の傷は両足の太ももと膝下にとても大きくたくさんあって人目が気になってしまい温泉なんて…と卑屈に思っていましたが、友達の上手なエスコートで存分に温泉につかることができました。今では頑張った勲章の傷とさえ思えるようになりました。

箱根にて

セシリアで学んだことが活かされて

在学中に「障害を持っていることはかわいそうなことではない」と聞いたことがありました。当時の私にはその意味を理解することができませんでした。しかし、今まで当たり前にできていたことができなくなってしまったことで、事故に遭ってからようやくこのことが理解できるようになりました。当たり前にできることに感謝できる心をもてました。たくさんの友人や信頼できる人たちと巡り会うこともできました。

寝たままでの生活を何ヶ月も過ごし、自分だけではトイレに行くことさえできず、歯を磨くのも、顔を洗うのも誰かの手を借りなければ何もできない日々が続きました。こんな自分が情けなく、これからの将来に失望し、何度も泣いてしまう夜もありました。それがひとつずつまた自分でできるようになったことで自信につながって、段々と前向きに自分を受け入れていくことの準備ができてきました。治療のための入院が一段落して、いよいよ日常生活に戻るためのリハビリ病院へ転院しました。

試練

ここで自分の人生観が大きく変わったと思います。まず、この病院に転院してすぐに担当医から「この病院に来たからといって、元に戻るとは思わないでください」とガツンといわれました。両親と共にこの言葉には正直驚きました。確かにリハビリ病院＝元に戻るとどこかで期待していました。今までは治療が第一だったので、着替えも看護師さんが手伝ってくれていたのにここではすべて自分自身でしなければなりません。靴下を自分で履くにも、体中の関節が硬くなり、膝が曲がらない状態の私は、はじめ一時間近くかかっていました。患者のおばあちゃんの車椅子だって誰も押してくれません。なんてスパルタなんだろうと泣けてきましたが、手伝ってもらうことは自分自身のためにはならないのです。

看護師さんたちと…

その病院で同じ年の女の子と同室になりました。彼女は荷物の下敷きになって脊髄を損傷していました。彼女の明るさ、頑張っている姿に自分も頑張りたい！と思い、リハビリに励みました。障害の程度も大変さも人それぞれ。誰が一番大変かなんて誰にも決められないと思います。ただ、「若いから大丈夫よ」とか「骨折なんてすぐ治るからいいじゃない」という無責任な発言にはたびたび心を痛めました。若いからこそ辛いこともあるし、どの程度のけがなのか知りもしない人からの言葉に「何もわかっていないくせに…」などと思ってしまうこともありました。大変さや辛さを比べることなんて誰にもできないことなのだと思います。見た目では判断できない、心の中でたくさん辛いことを抱えている人たちもいると思います。どんなに幸せそうに見える人だって、もしかしたら大変なことが過去にあったかもしれないし、今も抱えているのかしれません。寝たままの生活を送っている人の気持ち、手を借りなければ生活できない人の気持ち、そういった気持ちを理解できるようになったと思います。人として大きく成長できるかけがえのない時間や経験をさせてもらいました。

「10月27日は奇跡の起こる日だね」と私にそう言ってくれた友達がいます。そう言われるまで、私にとって思い出したくない日でしたが、優太君が　助け出されるのを見たとき、思わず涙が溢れました。助けてもらった命の大切さを忘れがちだった自分にとってもいつか同じように思える日になるように応援したいと思います。

（～間鍋さんが巻田隊長に送った手紙より）

奇跡の起きる日～巻田さんとの出会い

出会いは冒頭の通り、事故での現場で救出していただいたことです。入院中ずっと会いたいと思っていました。巻田隊長があるＴＶ番組の取材を受けたときに思い出に残るレスキューとして私のことを挙げてくださったことがありました。そのときは電話でお話しをし、退院したら必ず会いに行くという約束をしました。そして退院後に会いに行ったとき、涙を浮かべて喜んでくださいました。

私の事故からちょうど３年後の同じ日、新潟県中越地震で土砂に埋もれた車から２歳の優太ちゃんが４日ぶりに助けられ、そのニュースは日本全国を駆け巡りました。しかも現場での指揮を執る中になんと巻田隊長の姿がありました。他人事とは思えず、入院中にお見舞いにも来てくださった加藤次郎先生にその話をしました。加藤先生は「偶然かもしれないけれど、もしかしたら神の摂理なのかもしれない～今の気持ちを巻田さんに送ってみるのもいいかもしれないよ」と提言をしてくださいました。

私はそこで早速、巻田隊長に手紙を出しました。あの過酷な状況の救助から帰って私の手紙を受け取り、「新たに力をもらった」といってくださいました。私のした小さいこと（思ったことを手紙にかいただけ）で巻田隊長にそう言っていただけて本当に幸せな気持ちになりました。そして講演で私の手紙を紹介してくださっているそうです。誰かの力になれるほど嬉しいことはありません。あの時手紙を書くことを提案してくださった加藤先生にも感謝しています。

巻田隊長のプロフィール

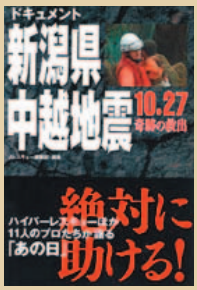
【巻田隆史（まきたたかし）】

昭和35年生まれ。昭和53年4月　東京消防庁入庁。昭和55年特別救助技術選抜試験に合格し、研修終了後、同年、芝特別救助隊配属。

以来25年に渡りレスキュー隊として活躍する。

IRT（国際消防救助隊員）として平成11年の台湾大地震に出動した経験を持つ。

昨年10月から秋川消防署防災指導担当係長に着任。



そのとき、ハイパーレスキューの巻田隊長が気づいた。「今、何か聞こえなかったか？」～ 突如静まりかえった崩落現場にただならぬ緊張が走る。全員が神経を研ぎ澄まし、岩と岩の間に耳をそばだてる。そして数秒後、全員が優太ちゃんの声を聞いた。
誰もが絶望的だと思っていた災害現場で起きた奇跡の救出。それを可能にしたのは、各分野のプロたちの連携だった。
～本文より～

「ドキュメント　新潟中越地震 10.27奇跡の救出」／イカロス出版

本書は、ハイパーレスキューをはじめ、救出の現場に立ち会ったさまざまな専門分野のプロたちの証言を収録。現場から語られる迫真のドキュメント集。

～再会～

巻田さんを訪ねて…
平成17年9月13日　立川消防署にて

Q. 常に「生」と「死」の緊迫した中でお仕事されていると思いますが今までで印象に残る救助活動は何ですか？

A. 現場に大小はないですね。一概には言えないです。新潟の優太ちゃんの現場は消防生活27年になりますが、二度とあのような現場はないと思います。美喜さんの現場では、隊員が成長したのを感じた現場でもありました。阪神淡路の地震以来、ただ命を助けるという救助ではなく、その後の生活を考えた救助活動を心がけています。美喜さんの場合にもただ助けるのではなく、歩ける為の救助をしなくてはと活動しました。

Q. 消防に入ることは小さい頃からの夢だったのですか？

A. いいえ。高校時代の部活顧問の先生にずっと警察官を勧められていました。ある時、都の新聞で消防士の募集を見て決めました。もし受からなかったら実家の家業を継ごうと思っていました。

Q. お仕事を続けている中で自分を支えている信念はありますか？

A. 難しいなあ…（笑）使命感。そんなかっこいいものじゃない。すまない。ただ活動を終えての達成感はすごくあります。
自分でこの仕事を選んでよかったと思います。外で、自分から職業を言うことはないけれど誇りをもっています。仕事をして、活動して人を助けられた達成感、それが自分を支えているのかなあと思います。

巻田隊長よりメッセージ

言葉では表せない大変な入院生活とリハビリ、美喜さんの本当の辛さはわからないけれど、私が言える事は、「美喜さん頑張ってほしい」の一言に尽きます。私だけでなく当時の隊員も同様であります。私は救助する側であり、仕事でもあります。美喜さんの入院生活やリハビリには我々は何の援助も出来ないのです。そんな私にとって、新潟の現場から帰ってきた時、美喜さんからいただいたお手紙は、新たな力を与え、同時に消防という崇高な職務をあらためて認識させてくれました。

その手紙は、宝物であり、お守りとしていつも身につけ現場に行っています。

”美喜さん頑張れ！！”

立川消防署にて

最後に…

今回、このような機会をいただけてとても感謝しています。会報に自分のことを載せることは、少し勇気のいることでした。その背中を押したもの…それは巻田隊長さんの言葉です。私が送った手紙を「宝物」と言ってくださったこと。本当に嬉しく思いました。

自分の気持ちを発信していくことの大切さをあらためて気づくことが出来ました。

巻田隊長と・・・

■コメント■

美喜さんの事故の一報を聞いたとき、「嘘でしょう？」という気持ちで病院の集中治療室へと向かいました。緊張が高まる中、白衣へと着替え再開した彼女の第一声は「白衣が似合うねえ」でした。本当に驚きました。優しい彼女は自分の不安を抑えて我々に心配かけまいと声をかけてくれたのでしょう。その日は、彼女が生きていることに感謝の気持ちでいっぱいであったことを覚えています。

昨年の９月に美喜さんと水越さんと巻田隊長が所属されている立川消防署を訪れました。立派な救助機材に圧倒されながらまず目にしたのはCPR（人口呼吸）の練習をしている救助隊の方々でした。こういった救助隊の方々の日々の小さな努力の積み重ねが彼女の救助に繋がっていたことを知り、再び感謝の気持ちでいっぱいとなりました。彼女の文章の中には「多くの人に支えられて…」とありますが、私はそんな美喜さんに支えられたひとりです。私は、現在大学院に所属していますが、研究生活が辛く悲しい時期がありました。治療中であった彼女に思いを打ち明けたことがあります。彼女は「すごくわかるよ。無理せず一緒に頑張ろうね。」と。本当に温かくこんな言葉を投げかけてくれる友人がいたことを嬉しく思いました。いつの日にか美喜さんは、「私は、周りの人に恵まれていると思う。本当に感謝しているの。」と言っていました。

この彼女の言葉は今でも心に残っています。

（平成７年度卒　斎藤　裕子（旧姓：山田）

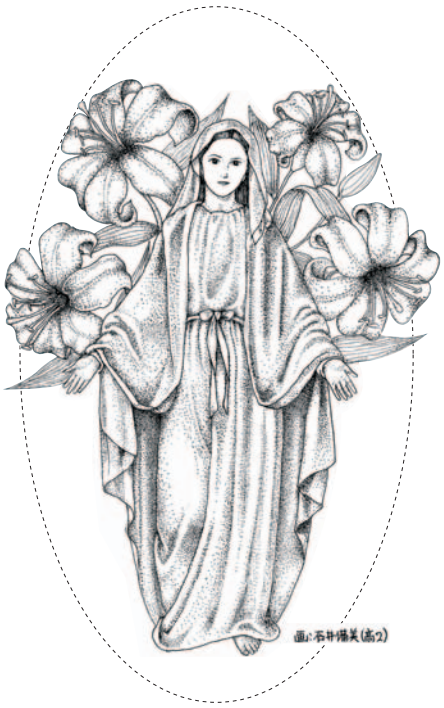
同窓会だより PART 3

佐々木　千晶　（平成15年度卒）

２００６年１月９日、成人式を迎えた私たちは新成人となったことを互いに祝して同窓会を開催しました。地域や親戚内での成人式を終えた直後で、皆忙しい一日だったようですが約６０名もの”セシッ子”が町田の「HUB」に集合しました。続々と会場に集まるにつれ、会う人会う人目を輝かせて再会の喜びを分かち合いました。

セシリア時代には学年カラーとして「和やか、かつおおらか」と言われてきましたが(!?)２年を経ても全くかわりなく本当に和やかな雰囲気の中での同窓会でした。制服を着て化粧もしていなかった高校時代と比べるとすっかり二十歳の女性の装いでしたが、話を切り出せばあの頃のキャラクターがそれぞれ蘇り大変盛り上がりました。変わりない一面もありましたが、それぞれの道を歩み始めた２年間は色濃いものでやはり内面の成長も垣間見られたように思えます。笑い声の絶えない２時間はあっという間に過ぎました。この会で「こんなにたくさんの頼もしい仲間がいる！」ということを、皆さん再確認できたのではないでしょうか。

皆それぞれの道を歩み始めていますが根底にはセシリアで養われた人間としての共通の基盤があると思います。その約束のもとこのようにして素晴らしい仲間でいられますことを、聖セシリアの学園と神様に感謝せずにはいられません。また無事に二十歳を迎えられましたことを家族、恩師、友人、多くの関わりのあった方々に感謝したいと思います。



NEWS!

「ただ信頼あるのみ」

聖セシリア創立者モニカ伊東静江先生の足跡

2006年2月没後35周年記念出版

聖セシリアの創立者”モニカ伊東静江前学園長の足跡”が小冊子になりました。ご希望の方がいらっしゃいましたら下記の通りお申し込みください。

■お申込み■

葉書に”ただ信頼あるのみ希望”と書かれ郵便番号･住所･お名前を明記のうえ下記へお申込みください。

＊電話でのお申し込みは出来ません。

■お申込み先■

学校法人　大和学園聖セシリア「ただ信頼あるのみ」係

〒242-0006　大和市南林間3-10-1

青葉祭の報告とお知らせ

昨年も初夏の青空の下、青葉祭が開催されました。松和会でも恒例となりました「セシリアサブレ」の販売と、子供たちに大人気のビンゴくじのゲームを行いました。特に「セシリアサブレ」は皆様に覚えていただけた効果か早々に完売となってしまい、嬉しい限りです。卒業生の方もたくさん顔を見せてくださり、お手伝いしながらも旧交を温めることができ、楽しいひと時を過ごすことができました。

当日の売上は **65,358円** となり、例年どおり学園に寄付させていただきました。

今年の青葉祭は５月２８日(日)に開催されます。この機会に皆様お誘いあわせの上お出かけくださいませ。

平成１７年度　松和会　会計報告

(単位:円)

前年度繰越金		3,921,056
収入	平成16年度卒業生会費(¥10,000X131名)	1,310,000
	預貯金利息	12
	雑収入	30,000
	収入合計	5,261,068
支出	通信費	333,730
	印刷費	293,302
	会議費	48,779
	雑費	284,270
	慶弔費	10,000
	支出合計	970,081
次期繰越金		4,290,987

＊差引残高　¥4,290,987-　は次年度に繰越いたしました。

INFORMATION

◇役員改選を行いたく、次期役員を引き受けていただける方を募集しております。同窓会のためにご協力していただける方がいらっしゃいましたら、是非ご連絡ください。松和会にご意見やご感想などがありましたら是非お寄せください。近況報告や住所変更などの連絡も随時下記FAXにて受付けております。卒業年度･氏名を忘れずにお書きください。なお、FAX上部には「松和会宛」と書いていただけると幸いです。

◇会報の原稿を募集しております。
「こんな素敵な卒業生」「同窓会便り」にご投稿いただける方、新しい企画の提案などお待ちしております。また、会報作成のお手伝いをしていただける方がいらっしゃいましたらお知らせください。

◇青葉祭でのお手伝いの方をお願いいたします。
昔の仲間同士で学生時代を思い出しながら、一緒に行いませんか？

＜お問い合わせ先＞

聖セシリア女子高等学校　松和会宛

TEL:046-274-7405　FAX:046-274-5070

編集後記

今年も桜の季節を迎えました。新年度を迎える頃に咲く(関東から西では)桜を見ると、何となく今までの人生の中での出会い、別れを思い出し感慨にふけってしまいます。色々なたくさんの人との出会いがあったから今の自分があるのですが、人だけに限らず「物」との出会いも、大きな影響を受けることがあるのではないでしょうか。

私は５年前、初めて沖縄を旅行した時に「沖縄三線」に出会いました。そして楽器を手に入れて練習するようになって、人との出会いがさらに広がりました。沖縄独特の音楽、三線がもつ癒しの響きが人を繋ぐのではないかと思っています。まだまだ未熟な三線の腕前ですが、暇を見つけてはこれからも練習に励みたいと思っています。(千田)